

# 地球第十五卷第四號

昭和六年四月

喞蘭新譯地球全圖を讀む

藤田元春

寛政八年(西紀一七九六)になつて大阪の蘭學者橋本宗吉氏の喞蘭新譯地球全圖が出た、これははじめて日本に出たグローブラー圖式による兩半球圖であつて、當時盛に世に行はれてゐた卵形圖式の世界地圖とは全く違つて目新らしいものであつた。

宗吉氏は名は鄭、絲漢堂と號し、傘工の家に生れて、伶俐であつたので、特に自ら傘の紋をかゝことに秀でゝゐた。天明年中になつて、全じ大阪の醫小石元俊が、漢方をすてゝ、蘭方に變つた時徒らに譯書によつてのみ診察をしてゐて、横文がよめなかつたのを悔ひ、宗吉の俊敏であることを見込んで、間五郎兵衛と相談して學資を興へ、宗吉に江戸に行つて蘭學をやつて來ないかとすゝめた。

宗吉は大に喜んで、直ちに其の求めに應じ、江戸に行つて大槻玄澤の門に入つた。流石は宗吉、

見込まただけの男であつた、眠食を忘れて勉強したので、僅か一年足らずの間に蘭書がよめるやうになつた。歸阪してさらに蘭學をつゞけて行つた。大日本人名辭典の云ふ所をみると、寛政十二年庚申に到つて、新譯地球全圖を出版したが、それは「和蘭の地誌十數冊を援引したもので、一々圖説をのせ方域、區劃、郡國の異動は勿論、諸品物の形狀種類産出の地に至るまで、細大漏らさず。加ふるに奇事異聞を以てし而かもまた地の圓體なる事を論じ、脚板相對の考証をしるし、五帶經緯の理をあげて、天文の概略に及ぶ」と賞讃してゐる。猶この人は「西洋醫事集成寶函」五十卷「和蘭醫學三法方論」を著し、遂に醫者として東國の宇田川椿齋と併稱せらるゝに至つた。しかし残念にも大鹽平八郎が與力となつて、京の入阪の「切支丹」をあげたとき、その連累といふので囚へられ文政十二年磔刑にあつて死んだといふ。

## 二

今予が手にして本誌に掲載した地圖は、右の寛政十二年版ではない、しかし各國の圖説奇聞珍談があり、地の球體なること脚板相對の圖、天文の話なども、すべて地圖の欄外に詳記され、序文にも和蘭之圖冊、亞都良察數十百頁を檢し、其の天璣坤珍を掇拾して之を作し、寛政八年發售とあるから、これが恐らく右の十二年版に先行した初版であつたであらう。

岡田伊三次郎氏所藏本目錄によると、全じ囑蘭新譯地球全圖、寛政八年版があつて、發行書林に北澤伊八、淺野彌兵衛、曾谷林藏と記されたのがあると全時に、も一つ全年の版で北澤伊八、淺野彌

兵衛、岡田新次郎となつたのがある、後者は再版であるといつてゐるから或はさうかもしれぬ、但し右の圖版はこの後者である。

三

江戸幕府時代に於て日本人が見た最も古い世界圖は、慶長元和頃の御朱印船に傳つた海圖を外にしては慶長十六年に家康の見た南蠻の世界圖を以て嚆矢とする。これは後日、家光が寫さして枕屏風として愛玩したが、没後侍臣梶佐兵衛の手にうつり、梶の没後、小野善助の有に歸し、それが維新に東京の北村泰一氏の有となつたのであるが、その北村家の卷物をみると、方格圖式の世界圖であつて、利瑪竇の漢譯した坤輿全圖、(オルテリウス圖即卵形圖)といふもの、又は一五七〇年の初版のオルテリウス、一五六九年のメルカトルの世界圖などと共通した地形の誤りがあるから、其の葡萄牙人が持ち來た當時の世界智識に一致することは慥である、故に恐らくこれは我國初見の世界圖であつたといつてよい。従つて傳説の通りならば寛永年代には、その寫本が日本に於て出來たことになる。しかし一般民衆が外國又は世界地圖として提供されたものは、ずつと時代が下つて正保二年(一六四五)になつて、長崎から「萬國總界圖」といふものが現はれるまでは、廣く分布しなかつた。この總界圖はその後寶永五年(一七〇八)になつて、やはり「萬國總界圖」といふ名で畫工石川俊之の手により、江戸の須原屋茂兵衛といふ地圖の本屋から發賣されるやうになつた。今之を手にしてみると、全く利瑪竇の坤輿圖に從つたもので卵形圖であり、一五六九年にメルカトルが初めて

記したアニアン Anian (北米の西北)があり、ノバギニアの南にメガラニカがあり、その附近に小爪哇、伯且、瑪力肚があつて、全く利瑪竇の地圖に従つたものであるけれども、記事極めて疎略であり、且誤字もある。猶各大陸の水系が支那式で無茶苦茶になつてゐる。

利瑪竇の地圖は餘程立派であるが、當時その坤輿全圖が出版されると、直ちに支那人がその地圖をみて模造したものが多かつたといふことであるから、恐らくこの万國總界圖は、利瑪竇の原本を見たのではなく、模造した支那製の坤輿圖に従つたものであらう。

そこで天明二年(一七八二)になると、水戸の長久保赤水が出て、總界圖よりも、更に利瑪竇に正しく合する地球万國山海輿地全圖説といふのを出した。それには利瑪竇の誤つた記事をそのまま譯して出してゐることによつて、慥かに其の摸倣であるといふ馬脚を現はしてゐる。

ついで天明三年(一七八三)には三橋釣客の手で、地球一覽之圖といふのが出て、水戸の赤水と全じやうな利瑪竇の卵形圖に似たものを出版した。但し之を總界圖に比較して餘程、利瑪竇の原本に復歸したものとといへると全時に、中には赤水の誤記を排除してゐる所さへ見えるのである。利氏が萬曆壬寅(西紀一六〇二)に、支那でつくつた地圖が百八十年も後世になつて、日本に賣れて行つたといふのであるから、我鎖國政策のいかに海外知識の傳播を妨げたかといふことがわかるではないか。

萬國總界圖と殆ど時を同じうして寶永七年（一七一〇）に「萬國掌葉圖」といふのが出版されてゐる、文臺軒宇平の板である。これも類本で寶永歲次庚寅（一七一〇）永田調兵衛板の「南膽部州萬國掌葉之圖」といふのもある。これは浪華子といひ、山城松尾寺の僧澹といふ學僧の作で、須彌山を中心とした世界圖であり。ヒマラヤの中央にあるマナサロワル湖をめぐつて大河回流する、即須彌山から同大河が流れて出て、世界の四方の海に入るといふ想像を記すといふもので、地圖といへば地圖ではあるが、恰も西洋で九世紀頃に出た宇宙圖 Anglo Saxon Map 又は一二八〇年の Hereford Map に比すべしもの、とても古代の Ptolemy's Map などの足下にも寄れない地圖であつた。それが十八世紀の初めに賣れたのであるから、これ又以て我國民衆、否一廉の學僧などの頭の中もわかるといつてよい。嘉永三年（一八四九）になつても、赤水の利瑪竇に從つた舊圖の翻刻が飛ぶやうにうれたことを思ふと、我國一般民衆に於ける地理學の進歩のあまりに徐々たるを嘆ぜずには居れなかつたのである。

## 五

しかし日本の有識者はさうではなく、和蘭との交通が絶えなんだから、和蘭の甲比丹が年々年始の御禮に江戸にゆき、長崎屋などに宿泊してゐると、竊かに其門を叩いて海外の知識を尋ねる人もあつたし、星學の進歩につれて、通事などの中には、海外の事情を正視するものが出來た。又これらの甲比丹も天地之圖とか世界圖などを献上品のうちにもつてきた。

新井白石が羅馬人シロテをキリシタン屋敷に於て査問したとき、(寶永六年、一七〇九)幕府所藏の地圖と(利氏)坤輿圖とを以て、世界のことを酌ねた。「采覽異言」の論によるとこの時白石は御府の中から西圖、アムステルダム出版フラアの圖といふのを出してきた。その圖は東西兩半球圖であつた、白石は利氏の橢圓圖とこの兩半球圖との異同について質問をした。蓋し白石は邦人として最初にこのグローブラー圖式の和蘭地圖(千六百七十年頃のもの)を見たのであつた。この圖は蘭人も見て、これは七十年前(?)本國で出來たもので、詳細なること本國でも得易からざるものだとおぼたので、白石も大に喜び、これによつて、利瑪竇の地圖の誤れる所を發見した。さうしてそのことを采覽異言の中に詳述してゐる、知友秋岡武次郎氏の報告によればこのブラアの圖は東京帝室博物館に現存してゐる大世界古圖二のうちの一本であらうといふことである。

## 六

さうした次第で寶永六年には、白石の如き大家が兩半球圖を見て、新しい世界をよく知つてゐたのである。にも拘はらず全時に萬國掌葉圖や、萬國總界圖が出版されて、民衆の眼にふれたのであるから、これを今日の時勢から見ると不思議なほどに、世の中の進みは遅々たりであつたが、やがつて殆ど九十年の星霜をへたる後、寛政八年(一七九六)になつてやうやくこの橋本宗吉氏の「喞蘭新譯地球全圖」(グローブラー圖式)といふ兩半球圖が出たのである。これ全く白石や昆陽の後に蘭學の興隆した結果であつて、こゝに我々の同胞は、はじめて、地圖らしい世界地圖を持つことが出

來たのであつた、この意味に於て橋本氏のこの出版は我國地圖學界に於ても空谷の輦音ともいふべく、大旱の雲霓にも比すべき「エポックメイキング」であつたのである。これ予が特にこの圖を江湖に紹介せんとするの最大理由である。

七

本地圖の新らしい點は第一に在來の地圖のやうに卵形圖でなくて、グローブラー式兩半球であつたことである、第二にメガラニカの形を全くかへて、濠洲大陸の西半が明に示れてきて、それに千六百十九年エーデルス檢出(Eder)千六百廿八年フランセ檢出(Pool)の一六二九年カーペンタリヤ航海のこと?)コレホルデ千六百十六年檢出(1616 Dirk Hartog の探見?)千六百四十四年檢出新オランダといふ。又、千六百二十二年レウイン檢出(Leevin)千七百二十七年ノイツ檢出(Neyts千七百は千六百の誤記)等の記事がのつてゐる、註記した通り、その記事に一二の誤があるけれども、レウインやノイツは地名として今日に残存する程で、この地圖の正しいオランダのアトラスから寫されたことは疑ふことが出来ない、さうして地圖の上にかうしたオーストラリヤの西半が現はれたことは、實に十七世紀の出來事として刮目すべき事實であつたのであり、メガラニカはそれと同時になくすべきであつた。いづれにしてもこの地圖のこの部分から判斷すれば千六百七十年頃(寛文)の地圖であるから、恐らく白石の御府の中から得た地圖の表はす所も亦これに近いものであつたであらう。

第三に日本の形は本地圖では天明三年の三橋の地圖や赤水の世界圖よりも餘程うまくなつてきて蝦夷、カラフト、千島が入つてゐる、一七〇〇年の *Wit* の世界圖に比して遙によく出来てゐる。入丈ジマ、ラガサハラが入つてゐる、しかしカラフトは四角な島であり蝦夷の形も整つてゐない。まげに西半球では不明にした北米の北西部を、東半球に於て之をいかにして、ア=アレ亞泥俺峽を入れてゐる。この點から見るとこゝはまだ不確であつたのである、實にこの地がはつきりするのは一七四一年のペーリングの航海や、又はラペルースやクツクの探檢以後の事であるからである。この後の兩者の探檢は一七七九年(安永八年)及一七八七年(天明七年)の事であつた。但し本圖はこれらの探檢以後の出版であるから、やゝ新しい日本方面の地圖があつたので、この程度の訂正が出来たことであらうと思はれる。

赤水の嘉永版には日本の附近に金島や銀島などいふ想像の島がある。利氏の圖には安房の沖に野島、桂島、双桂島などいふのがある。さうしたものが本地圖から全くなくなつてゐるのは新しい一証である。

東印度諸島の圖は、利瑪竇圖には誤が多く、萬國總界圖、赤水の山海輿地圖、三橋の地球一覽之圖、すべて全様な傳訛に富むてゐるが、本地圖は全くその欠點を無くしたといふ長所がある。

## 八

しかし橋本の圖にはまだ不完全な點が多い。第一に前にものべた通り、北アメリカの北西部は不



明であつて、利瑪竇よりも正しいが、之に對するアジヤの東北部は利瑪竇の想像圖に近く、まだアニアン峽の名を残してゐる、蓋しベーリング (Bering) の海峽探檢の最後の航程は千七百四十一年 (寛保元年) に終つた、故に本圖の原本はそれよりもずつと古いといふことがわかる、本圖亞泥俺峽に接して、テルラコンハギイとある。何によつたか只今の處不明である。

第二にカリホルニヤは、東紅海と大東洋とエニス海との間に島となつてゐる。これは利瑪竇では明に半島であるが、一七〇〇年の Wit には本圖と全く島となつてゐるから、丁度その頃の探檢家の想像であらう。當時 Tool 即エゾといふ地名は、餘程ひろく考へられたので、北太平洋にエニスといふ名があつたものと見える。南懷仁の圖にもアニアン海の南の半島に野作とかいてある。

第三にハドソン灣の形が正しくない。第四に南米ラプラタ (銀河) の上流が想像の大湖になつてゐる、これ又利瑪竇よりも、實際から遠ざかつたものであるが千百七十年代の南懷仁の沙來葉斯湖に一致するのも面白い。南懷仁の圖はいづれ後日機會を得て述べるであらう。

第五に中央アジヤに想像が多くヒマラヤ大山脈があつて、黃河、揚子江、メーコンの上流水源がいづれも丸い湖水になつてゐる。これは古い支那の地圖の系統をひく所の繪法である。

第六に北高海即カスピ海は利瑪竇圖の形は古い地圖を踏襲して最もよろしくないが、この地圖はやゝ其形を小さく正した。

第七にアフリカの水系は古い、一七九九年ダンヴィルのアトラスがで、この古い水系の想像をすべて改正した。しかし利瑪竇でも、メルカトルでも、乃至は萬國總界圖以下日本の世界圖、すべて

は古い水系であつて、文化七年高橋作左衛門の地圖になるまでは、このアフリカの水系は正しくはならなかつた。

第八に本圖のマダカスカル島の形が歪である、利瑪竇よりも拙であつて、萬國總界圖や地球一覽の圖の誤を繼承してゐる。

以上五、六の點は本圖がやはり古いまゝに之を踏襲した欠點である。之を利瑪竇に比べると餘程の變化であるが、勿論かうした誤があつたとしても、當時日本にあつた世界地圖中蓋し白眉であつたことは間違のない事實である。さてこそその後佛齋居士の撰となり、又は天保十一年田島柳郷の著として、全じ版が囁蘭地球全圖として二度も三度も出版されたのである。その我國の海外知識に影響したことは恐らく大なるものがあつたであらう。

## 九

きりしたんの連累で死ぬ位であるから、何かこの地圖にもかゝり合があらうかと調べた所、圖說アジャの中に「如德亞<sup>ジュデヤ</sup>古昔聖人此ノ地ニ降生ス、故ニ聖地トモ聖土トモ稱スルナリ」とあるに止まり、格別のこともない、又この文字位でそれが災を招いたとは考へられがたいけれども、或はこの話によつて、彼はキリストをしつてゐたとも云へる忌諱にふれ、ば觸れたとも考へらるゝ點である。

さうした新しいモダンではあつたが、しかし學問には古い所が多い、それが時代である。予は左にかうした新式の蘭學者と雖も、いかに漢學をやつてゐたかといふことの参考に、左に數節を抜いて

みるであらう。

「歐羅巴東西千八百里、南北千里、日本の里数を以て云ふ也總名を泰西といふ、又西洋ともいふ或は遠西とも稱す、三部に分ち各天子あり一は伊太利亞帝、初め羅馬に都し、後に度逸蘭土のオーステンレーキの内ウエネン（維納）に都す、二は莫斯科ビヤ、リユスランドのモスコビイに都す、伊太利亞の千三百廿五年にピーテルといふ姓の人始て帝となり、土人に教へ諭し、書計、利川、厚生之道或は交易の業を誨へ、地理を開き、水利を通じ、其勢強大富饒にして、都兒格、莫兒格、英兒格に比び、遂に三部の中にて最も大なり。三は都兒格帝ギリイケン（希臘）のコンスタンテンノッポロンに都す即唐の吐蕃といふ是也。

唐書曰景龍間、以金城公主下嫁吐蕃云々

とある、かうした書き方は、決して蘭學的の修養でなく、全く漢學者の口吻である。しかしこの吐蕃は今の西藏である、トルコではない、これは本地圖說中に於て橋本の錯誤の最大なものである。歐洲に三帝があるが外に王爵の邦十州あり、フランス、ポルトガル、エンゲランド等なり其侯國あまたあり、因てアジャ、トルコ、エウロツバトルコ、ランガリヤトルコの稱ある也と書いてのけたがこゝにも重大な錯誤を敢てしるした、地圖の方にはさうした誤がないけれども、説明になるとまづこの程度で、餘程あぶなつかしいことであつた。

## 十

フランスの條下に近來世に談柄とする所の飛行機船と云ふ器、奇巧創意諸蕃にこえ、巴里斯の孟突臥兒比伊兒（Montgolfir 1783）といふ人の創意にて、加爾力斯翼羅白爾杜といふ人の製造なり。又天下古今に比類なき窺天鏡の長大數十丈あるを製す、其望遠の効あげて數ふべからず。

といふ珍らしい記事がある。いかにも輕氣球はモンゴゴイルの作でチャールス及ロベルト兄弟が改造し、一七八六年十月飛行した、輕氣球の直徑十三尺であつた、紅毛雜話には、福知山城主榎木龍橋が秘藏した新刻の蠻書によつて其の圖まで出してゐる、カルレスエンロベルトと兄弟二人の名を一人の名にした點など振つてゐるではないか。

北米ではテルラノーバ極東の大島なり、其東に沙地ありカラntenバンク (Grand Bank) と云ふ、ノーバブリタニヤ(新英爾)ノーバフランス、ノーバイスバニヤ等の名はその發見植民の歴史を語りカリホルニアよりも東北は荒曠にして人氣みたず、巨蛇猛獸横行し人跡たゆ北荒の極也としるした南アメリカではアマソーンネンは大湖であるとしるし、ブラヅルは最大國、ポロ幸羅、バラグワイ、ウルグワイ、チリ知勒等をしるし。巴大温パタゴニアについては、

大人國ともいふ、州の極南とす、日本支那と凡そ脚板相對する所なるべし。左傳文公十一年收ニ狄獫狁ニ長狄僑如ニ杜預曰鄂瞞國之君、蓋長三丈云。魯語曰、仲尼曰、丘聞之、昔禹致群神於會稽之山、防風氏後至禹殺而戮、其骨節專車云々 古典の載する所其方城事實考べからずといへども、概て大人國の種類か。

日本寛文の頃奥の南部邊の漁人網して人臂を得たり、其指骨をはかるに、一節長四寸、と云ふ、大抵常人指の節間一寸に過ぎず、是を以て之を觀れば、其人長常に二丈四尺計なるべし。日本の東南、巴大温を去ること凡萬千里といへども、其際州島の隔つるなし、漂蕩して此に至るもあるべきこと也。

これは又思ひきつた大人國論である、對蹠圖でこちらの午の刻にあちらが子の刻であることは地圖の上に明記してある。專車の骨は孔子が防風氏といつたけれども、恐らく鯨の化石の骨であつたであらう、日本の東海で骨を拾つて、その説明をした所、新しい蘭學者にも不思議であつたに違ひ

ない、利瑪竇でも、巴大温長人國、其國人長不過一丈男女以各色、書面爲飾といひ、又巴大温地方其人長八尺故謂之長人國、皆無文字、以結繩爲治といふ説明で、かうした途方もない寢言はかいてない。

しかるに橋本氏は漢學をやつてゐたので、二丈乃至三丈の大男を想像した。これは彼の博識ぶりを發揮して却つて誤を重ねたのである。

しかしアフリカに就ては一つの見解をしめした。

厄日多、北地中海に接し、東亞細亞の「アラビヤ」に向ひ、西紅海を以て界す。西紅海地中海の交、地を距つること僅に數十里といふ。もし此處を決して兩海灣を通せば、西洋諸州の船、東海に航る事甚便捷ならんに、千古萬國の遺恨といふべし。

とのべた、これはスエズ運河が千八百五十九年佛人レセツプによつて開鑿されないう以前のことであるから誠に面白いことであると思ふ、日本にもかうした地理學者も居たことは愉快ではないか。

葛疑利亞 (Cape land) 西をカッパブリヤ岸 (Cape town) とす、南はしに杻山 (ターフェルベルク) あり岬をホツテントツテンといふ。此中に西洋諸蕃の海船を泊し、陰燐風波を候ひ、東洋に赴く也、天下第一の大洋やゝもすれば激浪海風、天を滔り懼るゝに餘りあり、海船こゝをすぐれば始めて生活するの思をなす。因て華人喜望峰と譯す。紅毛人これをカーブ・デ・グートホープと云ふ。

これは葡王ヘンリー二世の好望峰といつた所で橋本氏のいつたやうに舶人の蘇生の思からついた名ではない、葡國からこゝを發見したとき、さてこそ印度にゆける、前途は希望に充ちてゐるといふ程の名でグートホープといつたのである、この點橋本氏の誤であつた。

## 十一

以上諸外國の地誌には誤もあり、卓見もある、今そのアジャに關するものを見ると必しもさうではない、日本では八丈島黒瀬川小笠原州などを説明し、文祿に小笠民部少軸貞頼が行つたと斷じ、其初め無人島ブニシといつたとするすの類であり、支那の方面でも日本との關係を記述するの注意がある例令ば

普陀洛加山、寧波府の定海縣に屬す、五代梁の貞明二年に日本の僧惠鑄其地の居民張氏なる人と共に觀音院を建立す事は曹學佺の名勝志に見えたり日本醍醐帝延喜十六年丙子に當る寛政八年丙辰に至るまで八百八十一年寶利魏然として存す。

といふ記事これである、又舟山は寧波府の小島なり古い海湊にして舶を航す、今絶えて其事なしとしるす、これ亦邦人が嚆昔倭寇に行つた時の事實を記したのである。

蓋し西九州の人々は日本の上代から支那のこの舟山列島に交通し、現に蘇州の虎邱には、紀州名草郡補陀落山應供寺に寄進した崇徳天皇保延元年鑄造の倭鐘があり、寒山寺には明治年代に日本でつくつた巨鐘が寄進されてゐる。舟山島中の普陀落山の信仰は、紀州三番の觀音の詠歌にもふだらくやきしうつ浪とよみ、日光の二荒山フクラといふ名もこれに關係がある、佛祖統記には日本國沙門慧鑄が唐大中十二年、日本文徳帝齊衡二年(八五五)歸國に際し持ち歸らんとした觀音像が動かかなかつたので、之をそこに止めたと出てゐる。何れにしても舟山島と日本人との關係はふかい。さうしたことを記す點からみると橋本氏は決して蘭學一點張りの人ではなかつたのである。

暹羅については、古の赤土國也、即扶南の別種なりと隋書に見えたり、其國都に大伽藍、大佛殿、坐、立、臥三軀あり、小指の

萬厚一丈八尺其他の大き知るべし昔須達長者の址、堂の廣袤六里餘。

としるした、これは東蒲塞の舊都アンコル城を語つたのかもしれないが、かやうに誤つたのは、天竺徳兵衛渡天記である。天竺徳兵衛の物語は采覧異言、三才圖會、甲子夜話あらゆるものに引かれ、今又この地圖にも引かれて、すべての地志を誤つた、(歴史と地理、第二十七卷第一號天竺徳兵衛渡天航路考參照)

又鬻牛について、これ賓童龍國か、佛典に所謂舍衛に食を乞ふと即この地也目連尊者の遺蹟今尙存すとある。これも徳兵衛物語以後の「長崎」あたりの話柄なるもの、一つをしるしたのである。錫崙「或は齊狼、世に識る所の釋迦世尊の法をときし靈鷲山此島にあり、高さ十二里」と記したのは、勿論誤記であるが、これはこの地の佛教徒の今も左様に信じてゐる虚誕であり、又全くこの山を「アダムスベルクといふ」とのべたのは、この地の回教徒が太古アダムスこの山に下ると傳説してゐるので、これ又その土地の語をこゝに譯出したのである。榜葛刺「古い東印度の地今は莫臥爾に屬す。丹土を産することよく世に知るところ也其東南の海をベンガラ海といふ」とあるが今日でも京、大阪では、家の柱や戸をぬる、赤い土をベンガラといふ。印度のベンガラからきた塗料からの名であるらしい。これは日本外来語辭典や、倭訓栞も全意見である。但し現在のベンガラは日本國內に於ての一の化學工業製作品となつてゐる。

以上通覽する所によつて本書の地志がどういふ風のものであつたかゞわかつたことと思ふ、これを今日の地誌から見れば、不十分であるといふ點もあるが、しかし數理地理の大要を掲げたのみで

なく、かうした地志細説にまで及び、よく當時の人心をひきつけたであらうことを考へるときに、この地圖の齎らした効果は偉大であつたものとせねばならぬ。いづれにしても、我國での近世的外國地志の一大教科書であつたであらう、これを結語とする。昭和六年三月

## 山地溪流に於ける三岐腸渦蟲類の分布

上野益三

### 一

或山地溪流水系の下流からその源流まで遡つてその動物相を調べて見ると、下流から上流に進むに従つてそこに棲んでゐる動物の種類が次第に變つて來ることが知られ、又同一種の動物でも上下流にてその或一定面積に居る密度に著しい差違を示すことがわかつてゐる。この事實はその源流の海拔高距が大きい程著しい。かやうに或水系の上下流によつてその分布相に著しい差違を示すもの中で、最も興味深く且最もよく研究せられてゐるのは三岐腸渦蟲類(Platyhelminthes)の分布を最も詳しく研究したのはフオイヒト氏 **Valter Voigi** (1892, 1895, 1896, 1904等)である。氏は中部歐洲に於ける山地溪流にて三岐腸渦蟲の三種類 *Planaria alpina* (**Dana**), *Polycelis cornuta* (**Johnson**) 並に *Pla-*